

Title	戦争の本質と起源：戦争社会学序説
Sub Title	
Author	加田, 哲二
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1937
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.31, No.3 (1937. 3) ,p.341(1)- 392(52)
JaLC DOI	10.14991/001.19370301-0001
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19370301-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

現代財政學の理論

慶應義塾大學教授
永田清著

菊判縦組三九六頁
背角クローズ装
定價二・八〇 送料三三

新刊

著者は慶應義塾大學に財政學を講ずる新進萬鏡の學者であり、本書に説述された内容は現代の革新された財政學理論の全面的批判的考察である。惟ふに、前世紀末葉の財政現象は經濟機構の中でさして重要な地位を占めず、この時期に成立した財政諸理論はその時々の財政現象や制度を非組織的に攻究する技術論の範疇を出でず、而も斯る財政學が大した理論的發展をみる事なく後續の諸學者に受け継がれてきたのである。ところが、近時財政は經濟生活に於て一氣に躍進し、經濟一般の統制化、政治化に伴つてそれは實に一國の運命をも左右する程の比重を有つに至つた。財政現象のこのやうな本質的變化に照應して、最近幾多の學者の努力により、眞に革新的な理論が種々樹立され、傳統的理論のよくなし得なかつた現實財政の科學的解明に驀進してゐる。著者はかやうな現代の革新的財政理論を綜觀批判して諸々の類型に分ち、各々の理論を詳細に紹介分析して本書をなした。まことに本書は現代財政學の諸理論を知るに恰好の書である。目次 前篇—共同欲望論の財政學 全體主義の財政學 目的論の財政學 功利主義の財政學 後篇—財政學の社會理論 財政社會學の展開 二元的經濟組織論 財政學の政治的性格

財政學大綱

大内兵衛著

(上卷) 菊判紙裝 二九六

(中卷) 菊判紙裝 二五〇

定價 一・六〇 送料 二一

三田學會雜誌

第三十一卷

第三號

戰爭の本質と起源

—戰爭社會學序說—

加田哲二

ヨーロッパ大戰後、平和主義の興隆は、目覚ましいものがあつたが、最近において著しく下降沈滞するに至つた。ヨーロッパ大戰以後においては、大戰において、それまで發展し來つた帝國主義諸國の政治的經濟的對立・矛盾が一應清算せられ、ヴェルサイユ條約において、その貸借對照表が與へられたのであるが、この條約の企圖したところは、戰敗國からの領土・物資・武器・賠償金の收奪であり、その將來における戰爭能力の剝奪であつて、かゝる方面においては、過酷なほどの條件を戰敗國に課したのである。しかしながら、戰勝諸國における状態は、何等改善せられてゐない。英・佛・米・日・伊を中心とする重要聯合戰勝諸國の關係は、ヨーロッパ大戰を招來した諸條件を、

戰爭の本質と起源

一 (三四一)

東京 神田 岩波書店 振替 東二六四

そのまゝに残して、これら列強の關係がヴェルサイユにおいて調整せられねばならなかつた。即ち戦争勃發の要因を含んだまゝ、これらの諸國を中心とする國際聯盟體系が形成せられた。國際聯盟は、ヴェルサイユ條約體系を維持するための集團保障規約であり、従つて、ヨーロッパ大戦以前からの帝國主義的對立と矛盾とをその中に包含したところの現状維持的國際政治體系であつた。

この現状維持的國際政治體系に對しては、少くとも、三つの現状打破的勢力が存在する。その第一は、ヴェルサイユ體系自體内においてある。ヴェルサイユ條約は、英・米・佛の利益を最も尊重した。これは、國際政治の力的關係において、止むを得ないことであつたが、このことは、戰勝國側におけるすべてを満足せしむるものではなかつた。イタリーは、三國同盟の締結者であつたが、その政治上の必要から聯合國として參戰したが、その目的は、フューメその他の領土の獲得にあつたことは明かである。ムツッリーニを始め、參戰運動の參加者が、イタリア・イレデンタ即ち大イタリア主義による領土擴張を夢みてゐたことは、確かである。しかるにヴェルサイユ條約は、そのイタリーに所期のものを與へてゐない。わが國の如きも、イタリーと同様の立場に置かれてゐた。わが國が參戰したのは、日英同盟の交誼によつたのであるが、ドイツ軍から奪つた山東の如きは、ヴェルサイユ條約においては、日本にその處置が一任せられたけれども、それに續くワシントン會議においては、支那に對する還附が強制せられたのであつた。資源の過少と人口の過剩に悩むわが國は、かゝる少部分の割前をすら與へられなかつたのであつた。かくの如き領土的紛擾は、民族自決主義による群小國の建設に際しても諸方に展開されたのはいふまでもない。戰

敗國の指導的國家であるドイツがこの條約に不満足であるのは、いふまでもない。ドイツは、エルザス・ロートリンゲンの外に、ベルギー國境の一部、シユレスウィツヒ・ホルシュタインの一部、上部シレジエンの炭坑地方、ワイクゼル流域の所謂ポーランド廻廊、アフリカ並に南洋の植民地を領土的に割取せられ、その上に巨額の賠償金・船舶・貨車・機關車・武器の引渡を要求されてゐる。このドイツが、かゝるヴェルサイユ條約——無賠償無併合のウイロン主義の轉化——に著しい不満を有してゐるのはいふまでもなく、ヴェルサイユ條約打倒は政治運動における左右兩翼の均しく唱道したところであつた。この主張は現状維持に對する現状打破である。従つて、ヴェルサイユ條約の體系中には、戰勝國の間においても、また戰敗國の間においても、著しい不満が存在したのである。

その第二は、サウエート同盟の成立である。戦争によるロシア政治機構の崩壊は、一九一七年十月にヴォルシュエヴィキ革命を成立せしめた。革命の當初においては、ヨーロッパ・ロシアにおいて、また東部シベリアにおいて、列強の對露干渉が行はれたのであるが、數年の後には、サウエート同盟は、これらの諸國の軍隊を自國領から撤退せしめ、その領土内における反革命分子を彈壓して、プロレタリア獨裁を主張する共産黨の政府を強化した。しかるに共産主義は單に一國の共産主義化を主張するのみでなく、世界革命の理論を持つてゐる。このことが第一に列強の干渉を受けた點である。共産主義の世界革命運動は、先づ中歐諸國に向けられ、幾分の成功——例へばハンガリ革命の如き——を遂げたが、遂に歐洲からは、退却せざるを得ざるに至つた。しかし、このことは、世界革命理論の放棄を意味するものではない。文明國赤化の政策は、後進國赤化の政策に轉換し來つたのである。植民地または半植民

地國の赤化政策に、コムインタンの政策が轉じ來つたのである。かゝるコムインタン（その代表としてのサウエー
ト同盟）の政策は、直接これと干戈を混えないでも、植民地を有し、または半植民地國と接壤し、これと密接な關係を
有する強大國にとつては、直接の影響を持つのである。まして、サウエー同盟は、世界陸地の六分の一を占め、こ
れを圍繞する幾多の後進民族の存在するのであるから、世界の列強は安んずることを得ない。對サウエー關係が
常に、列強の問題となる所以である。

その第三の要素は、植民地並に半植民地國の發展である。ヨーロッパ大戰以前においても、植民地または半植民
地における民族運動は、既に存在した。しかし、この民族運動が強化されたのは、ヨーロッパ大戰以後においてで
ある。その理由には二つある。第一は、その政治的覺醒である。ヨーロッパ列強の植民地は、ヨーロッパ大戰に際
して、財政的または武力的援助をその本國に惜まなかつた。植民地は、本國の政府に、巨額な戦費を送附すると
もに、その土着民の軍隊をも送つた。かゝる行爲は植民地の政治的覺醒を齎らさざるを得ない。第二は、その經濟
的發展である。ヨーロッパ大戰は、ヨーロッパの工業國をして、軍需工業に専念せしめたために、平和的商品の生
産額の減少を來すと同時に、その値上りを招來した。この現象は、植民地または半植民地國における雜品工業の顯著
なる發展を來さしめた。この發展は、従前からの本國または列強の投資と買辦的土着資本の發展とに、その基礎を置
いてゐる。本國または列強の資本主義的商品の大量輸入と事業投資とによつて、植民地または半植民地の統一と發
展とが成され、更らに土着資本の發展は、それに拍車を懸けた。この基礎の下において民族運動が發展し來るので

ある。民族運動の基本的形態は、植民地の本國からの獨立、半植民地に對する列強の政治的干渉の排除、國家とし
ての完全な獨立性の獲得にある。かゝる運動の勃興は、本國または列強の植民地的利益に對する侵害として、これ
に對する彈壓の方法が考へられる。この場合の頂點に達した状態が、植民地的戦争となつて現はれる。

かくの如き三つの條件は、何れも現状維持的企圖に對する障害であるが、このヴェルサイユ條約體系下に統制さ
れない従來からの條件——この條件がヴェルサイユ體系を形成せしめ、破綻せしめるものであるが——が、顯著に
作用してゐる事實を看却してはならぬ。それは列強の帝國主義である。帝國主義は、自國の植民地を防禦するのは
勿論である。これを持たない國家は、これを獲得しやうとする。英・米・佛の如き植民國家・ソ聯・中華民國の如き廣
大領域の國家は、その領土並に支配圏を維持し、これを擴大しやうと勉める。これらの諸國は領土所有國(Territorial)
であり、日・伊・獨の如きは無領有國または僅少領土國(Minor Territories)である。このハッブスとバァヴ・ノットとの闘争
が、領土を繞つて行はれる。而して現在の列強は、自國の領土または支配下の國土を中心として、一のブロックを
形成せんとする傾向がある。一のブロックの形成は、他の勢力の排撃である。その他に列強相互間に植民地・半植
民地に對する貿易戦が演ぜられてゐる。これらの基礎の上に行はれる闘争は、イデオロギー戦である。これは、中
世から近代初期に行はれた宗教戦争に似たものがある。ヨーロッパにおけるファシスト國家對社會主義または人
民戦線國家の對立、コムインタン（代表國家・ソ聯）對日獨防共協定の如きがこれである。

これらの諸條件がヨーロッパ大戰直後の平和主義を凋落せしめて、現在の戦争中心の國家觀を勃興せしめたので

ある。

二

戦争の理論も、かゝる諸条件の變化に従つて、變つてゐる。國際聯盟・不戰條約の如きは、平和主義ではあるが、戦争の勃發を豫想してゐる組織であり、戦争の勃發を未然に防止し、これを平和的に處理しやうとするものであつて、戦争勃發の原因となるべき事實を否定し、または除去せんとするものではない。寧ろかゝる事實の存在の認識の上に立つてゐるものである。従つて、これらのものは、戦争の手段たる軍備を廢止するのではなくて、これに制限を加へんとするものである。國際軍備縮少會議の如きは、これであり、これまで主として海軍力の各國比率による制限が行はれて來、一九三七年に至つて所謂無條約時代に入つたことは、周知のことである。

ヴェルサイユ條約下において、直接軍備の制限を受けたものは、ドイツである。多數の軍艦・武器を沒收せられ、陸軍は常備軍十萬に限定せられた。かゝる状態の下において、ゼークト將軍がその「諸兵聯合の指揮及び戦闘」なる軍令書において、「本令は平和條約に依り強制せられたる十萬の陸軍に適應する如く定められたるものではない。否現時の世界における強大國の兵力編制裝備を基準として定められたものである」(註一)といつて、大軍隊の建設を目標とはしてゐるが、現實の條件は、當時においては、國防軍十萬、警察官十萬が、その基準をなし、これに有事の場合には、大戦の經驗者を編入せしめることが企圖されてゐたのである。

(註一) 佐藤安之助 大陸軍建設を目標に 世界現狀大觀 獨逸共和國篇 昭和五年刊 二一七頁

かゝる事情の下において、戦争理論は、大部隊戰術理論から小部隊機械化理論に轉じ、これを實行した。その理由は、「これらの理論はヴェルサイユの講和條約によつて成立した國際關係の情勢から切り離しえない。ブルジョアジエの軍事理論家は、ヴェルサイユ條約による勢力關係を長期にわたつて持續するものと見做した。」(註二)からである。次に、財政的理由である。ヨーロッパ大戦による巨大な軍事費には、最早何れの國家もその財政難を嘆じ、軍事費の削減を企圖してゐた。このためには、「小部隊機械化戰爭論者が諸國に現はれた。即ちイギリスのフアラ、イタリーのデヴェ、ドイツのゼークトの如きがこれである。」(註三) わが國における大正末年の宇垣陸相の四ヶ師團減少、機械化部隊の設置は、かゝる小部隊機械化戰術を實行に移したものであらう。

(註二) イ・レーミン 「小軍隊」理論からファッシヨ的「總體戰」理論へ 世界政治經濟情報 第九輯 戦争問題特輯 二二頁

(註三) イ・レーミン 前掲書 一九頁

しかるに、世界の國際情勢は、既に記したやうな發展を大戦後に遂げてゐる。殊に、戦後の慢性的不況が、一九二九年の世界恐慌に發展するや、政治部面における最も活潑な恐慌對策の要求となつて現はれた。列強は、各々その商品の販路として、また帝國主義的投資の地域として、特殊支配圏の防衛並に、獲得に狂奔し、資源の分配・植民地の再分割は主張せられ、その背後に強大な軍備の必要が強調せられ、要求せらるゝに至つた。而して、かくの如き強大な軍備の要求は、第二次世界大戦の準備であることはいふまでもない。次の戦争が何れの場處において、即ちヨーロッパにおいて、または極東において行はれるにせよ、その規模が世界的であるべきことは明瞭である。

この情勢に適應した理論が、ルーデンドルフ將軍の總體戦争論である。(註四) ルーデンドルフ將軍はいふ。

「各種の爆弾のみでなく、パンフレットその他の宣傳材料をも住民に撒布する航空機の進歩發達と共に、敵のラヂオ宣傳を普及せしめるラヂオ網の發達進歩とともに、總體戦はさらに一そう深刻な性質を帯びて來た。すでに世界大戰の際にも交戦國は幾千キロメートルにわたる奥行き深い交戦地帯において戦争し、戦争そのものと同じく戦線附近の住民を甚だしく疲弊せしめたが、今や戦場は、この言葉の完全な意味において、交戦國の全領土に擴がるのである。軍隊のみでなく國民も、すべての層が同じ程度ではないにしても、直接に宣戦に参加する。國民はまた食料封鎖や宣傳のごとき事物を経て戦争にまきこまれる。ちやうど過去において、要塞の住民が戦争にまきこまれ、彼れの窮境や飢餓のために、要塞の引渡しを余議なくされたのと同様である。かくて總體戦は武装兵にたいてのみでなく、直接に國民に對して行はれる。……總體戦の本質は、全國民にたいする致命的脅威が實際に發生し、そして國民が戦争の重荷を擔ふ決意に滿された場合に、始めて、實行し得るとき性質のものである……」

(註五)

(註四) General Ludendorff, Der totale Krieg, 1929

(註五) レーミン 前掲書 三五―三七頁

わが陸軍も、國を擧げての軍備充實を主張してゐる。

「現代において國防力を形成するものは當に軍備のみではない。軍備・經濟・思想其他物的に心的に發揮せらるゝ

總ての力が參與することに依て、國防力は形成せられるのである。即ち國防力は國家の實力そのものとも言ふべきであつて、國防力即ち國力とも謂はるべきであらう。軍が内治・思想等に就き深き關心を有するの所以も、亦實に此處に存するのであつて、國家の總べての力を培養發揮し、之が一體的發揚に依て自信ある國防力を構成することは、刻下の情勢に於て眞に緊要のことである。(註六)

(註六) 陸軍省 帝國及列國の陸軍 昭和十一年版 四頁

更らに陸軍省の他の小冊子には、次のやうにいつてゐる。

「近代戦争は國家國民全體の關與すべきもので、『國家國民の生存に於ける努力の極致』だと見るべきである。それを一言にして言へば、『近代戦争とは、國家間の生存競争の白熱したものである』といふことが出來やう。

されば、吾々國民の一切の生活は、實に戦争行爲の一部であり、更にそれ自體が戦争の實體をなすものである。もつと判り易く言へば、政治も、經濟も、教育も、宗教も、藝術も、一切の國民生活が、戦争の基礎をなすものである。(註六a)

(註六a) 近代國防の本質と經濟戰略

國民生活の戦争の準備への從屬を主張するものは、ドイツの總體戦争論者である。彼等は、クラウゼヴィッツの「戦争は他の手段をもつてする政治の繼續である」といふ命題を、「政治は戦争の奉仕者である」といふ命題に置き變へてゐる。(註七) ルーデンドルフ將軍はクラウゼヴィッツの清算を主張し、戦争の政治に對する支配を説く。ウ

オルタは、更らに進んで「戦争の社會憲法」の構成をもつて、現下の最重要課題であるとする。彼はいふ。

「二十世紀は未來の史家によつていつか戦争の世紀と名づけられるであらう。この定義は大きな、そして多數の戦争が實際に行はれたといふことからのみでなく、人類生存の表現形式としての戦争の徹底的變化といふことから生れる。…戦争はもはや、獨立の意義をもたぬ偶然的な事件とは考へられない。戦争は、平和をすつかり廢絶したくは思はなかつたとしても、少なくともそれから解放され、それを自分自身の法則に従へようと欲してゐる。戦争は獨得な、獨立的な、自分自身の法則を有つた現象、自己の存在形態においては、平和と同價値の現象として進出した。以前には、平和は戦争にたいして、自分自身の秩序を附與し、戦争を法律の埒にはめこまうと欲し、自分の法則と價値の支配下に置かうとしたが、現在では反對に、平和は戦争の要求に服従せねばならぬ。戦争は世紀の主人となつた、戦争は平和を休戦の地位に追ひやつた。時代の最も主要な特徴を形づくる戦争の如き解放は、その實行のために、さらに最後の仕上げの一步を要求する。即ち平和の前提に基いた社會秩序を廢止し、戦争の特殊な必要に應ずるものをもつて、それに代へることである。かういふ戦争の社會憲法を創造することは、また今日の特殊な課題となつてゐる。」(註八)

(註七) レーミン 前掲書 三七頁

(註八) レーミン 前掲書 四一―四二頁

ルーデンドルフまたはウォルターの如き立場によつて、クラウゼヴィッツの戦争理論を清算し得たのだと思ひ込

むことは、戦争に關する認識の不足を現はすに過ぎない。いまや、總體戦争論や廣義國防論は、いたるところに行はれてゐるのであるが、それは戦争の政治に對する支配ではなくして、政治の變化が戦術・戦争の變化となつて現はれてゐるのである。故に、エヴァルト・パンゼの如きナチス軍事理論家も、戦争は一の手段であつて、政治がその目的であることを認めてゐる(註九) このパンゼの立場は、かゝる限りにおつては正し。

(註九) Ewald Banse, Raum und Volk im Weltkrieg. English translation, Germany prepares for War. A Nazi Theory of "National Defense." 1934. Chap. I.

戦争理論がいづれであるにせよ、現實に戦争が近づきつゝあること、そのために列強が軍備の擴張に努力しつゝあるのは事實である。(註一〇) この事實は何人も看過し得ないところであり、現代人として、何人も注意をこゝに向けねばならぬ。それは、すべての國民と直接の關係を、その生活に持つばかりでなく、實に、その生活の規整せられる國家の大問題だからである。この問題が近時財政經濟の問題として採り上げられ、戦時財政・國防經濟が論究せられるのは、當然の傾向であるが、社會學の問題としては、寧ろ採り上げられることが、極めて稀である事實は、社會學の如き現實の問題に直面する學問としては、不思議の觀なきを得ない。殊に、現代の戦争が、單に武力戦のみではなく、經濟戦・思想戦であるといはれてゐる以上(註一一)それは、既に社會的戦争といひ得るからである。かゝる見地から社會學の見地から戦争を論ずることは、現在の社會學の一大課題でなければならぬ。(註一二)

(註一〇) 前掲 陸軍省小冊子參照

戦争の本質と起源

(註一) 陸軍省新聞班 国防の本義と其強化の提唱

(註二) 筆者はかゝる見地から戦争社会学を問題とする。これは筆者のみの主張するところでないことは明瞭で、シュタインメッツの如きは、戦争社会学の大著を發表してゐる。筆者の次の論稿は、素より不備ではあるが、多少の参考となるだらう。

「戦争社会学の課題」 日本評論 昭和十一年四月號 「戦争社会学文献雜考」 三田學會雜誌 第二十九卷十號

「戦争論」 三田評論 昭和十一年十月號

三

社会学は從來から戦争なる事實に盲目であつたのではない。社会学は、その社会科学としての後進性の故に、人類の原始的状态の如き、國家と國家との關係の問題の如き、その科学的歸屬の明瞭でない領域の現象を論ずる傾向を持つてゐた。(註一三)而して、社会学體系の成立時代、即ち第十九世紀の後半における社会学者の努力は、實にかゝる方面に向けられたのである。而して、生物学におけるチャールズ・ダーウィンの貢献を、社会学の領域において、採用せんとする傾向が強く存在した。この傾向は、ハアバート・スペンサーの研究とともに始まつたものであつて、社会的ダーウィン主義(Social Darwinism)と呼ばれるものである。社会的ダーウィン主義といふ言葉は、確定的な意義を持つてゐるものではなく、これを使用する人によつて多少の差異がある。しかし、その主要な傾向は、競争並に闘争の現象、殊に團體と團體との間の競争と闘争並にかゝる闘争による均衡と調整によつて、社会現象を説明せんとするものである。即ち生物現象におけるダーウィンの學說によつて、主として類推的に人間の社会組織と社会

進化とを説明しようとするものである。かゝる社会的ダーウィン主義は、第十九世紀の後半に繁榮した學說であつて、當時の國際的戦争、即ち植民地の掠取、小邦の屬國化または併合に對して、その理論的基礎を與へ、社会現象においては、生活における優勝劣敗の事實を、これによつて説明し、殊に經濟生活における弱肉強食の事實を説明し、經濟的個人主義、即ち經濟的自由主義に社会学的基础を與へたものである。かゝる意義を持つてゐた社会ダーウィン主義は、第十九世紀の後半並に二十世紀の初葉におけるルドウィヒ・グンプロウィツ、グスタフ・ラッツェンフォーハア、ウォルター・バジオット、ジャク・ノヴィコウなどの著作によつて代表せらるゝ社会学思想である。これらの諸學者の立場は各々異つてゐる。しかし、その共通の立場は、闘争・淘汰・順應といふやうな言葉によつて、すべての社会現象を説明してゐるのである。(註一四)

(註一三) Franz Oppenheimer, System der Soziologie Bd. I.

(註一四) F. N. House, The Development of Sociology, 1936, 158-159. 本節の記述に關しては同書第十四章 社会ダーウィン主義 一五八一—一七八頁に負ふところ多し。

ダーウィンが「種の起源」を發表したのは、一八五九年であるが、彼は生物の生存要件として、生存競争を擧げてゐる。

「生存競争は、有らゆる有機物が高度の比率を以て増殖しようとすることから、必然に起るものである。その自然的生涯の間に、多くの卵或は種子を産む各生物は、その生涯のある時期の間に、又は或る季節若しくは或る年の間

に破滅を受けなければならぬ。然らざれば、倍數増加の原則によつて、直ちにその數は、如何なる國もその所産を支へる事の出來ぬ程、非常な多いものになるだらう。斯く生存し得るよりも多くの個體が生れるので、如何なる場合においても、或る個體と同種の他の個體或は他の種の個體との間に、若しくは、其の周圍の物理的生活状態との間に、生存競争が起らなければならぬ。これはマルサスの學說に更に幾倍の力を加へて、それを全動植物界に適用したものである。何となれば、この場合には、食物の人為的增加といふやうな事も、又結婚の慎重な制限と云ふやうな事もあり得ない。ある種が多少迅速にその數を増加することはあるが、有らゆる種が同様に増加する事は出来ない。何となれば、世界は、これを支へ得ないだらうから。(註一五)

(註一五) Charles Darwin, *Origin of Species*, 1859. 大杉榮譯 種の起源 一〇四—一〇五頁

かゝる生存上の必要による自然淘汰の學說を動植物一般の理論として適用し、後の社會學者は、この理論を更に社會現象に適用したのである。このダーウィンの所説は、引用文中にも現はれてゐるやうに、マルサス人口論の前提をなすものである。従つて、その理論的發展においては、マルサス—ダーウィーン—社會ダーウィーン主義者の段階を経てゐるのであつて、社會科學者、殊に人口論者としてのマルサスが、人間の本能としての性欲と食欲の普遍性と生活資料の限界性との關係から立論した人口法則(註一六)に立脚した點において、マルサスの偉大な業績といふべく、この事跡の評価をダーウィーン以後にいたるまで、社會學的に評價するもの極めて稀であつた事實は、決して社會學者の名譽ではない。

(註一六) Malthus, *An Essay on the Principle of Population* 1797

社會學の範圍におけるダーウィーン主義の適用は、ウォルター・バジオットの一八七二年刊行の「物理學と政治學」に始まつてゐる。(註一七)「物理學と政治學」は、既に彼の先驅者サア・ヘンリー・エス・メインの著作に現はれてゐた思想の手際のない綜合であつた。彼の問題の取扱方法とその名文とが、彼の名聲を與へたものであり、社會學上における注意を喚起したのである。「物理學と政治學」は、人類社會並に歴史に對する自然淘汰理論の明白な適用である。「物理學と政治學」における物理學とは、生物學を含めての自然科學と同義語であり、政治學は社會科學と意味を同じくしてゐる。この著は社會科學に對する自然科學の應用として、また兩者の綜合として、その刊行當時にあつては、獨創的なものを持つてゐた。二百頁許りの小冊子に、廣汎な社會進化の理論を展開し、その自然淘汰的社會理論は、後の社會理論を影響することが大であつた。バジオットの社會進化論における第一歩の認識は、單獨なる部族または民族における「慣習の凝結」の形成である。即ちすべての場合において、集團内における個人の行動を規整し、指導者に對して大衆を有効に服従せしめる一聯の規律並に慣習の發展がある。これらの規律は、政治的に宗教的承認によつて支持せられてゐる。かくの如くにして、集團が、その結成をなし遂げた場合、それは、他の集團を征服し、これを絶滅せしめるか、またはこれに自己の方式を課するのである。この過程は集團の淘汰を行ひ、かくて、集團の組織及び統制の形態に對する淘汰をなすのである。

(註一七) Walter Bagehot, *Physics and Politics* 1872

「民族形成」は、異なる群團または部族の構成員の間における人種的差異の基礎において行はれるのではなく、顯著にして、魅力的な個人の示してゐる態度・典型的な行動・性格形態が、大衆の間に模倣的に擴大することに、その基礎を置くのである。而して、一の典型が成立すると、模倣の勢力は、これに倣はない者に對する迫害となつて現はれる傾向によつて、強化せられる。この命題はある程度までの社會的進歩の説明にはなる。しかし文明がこの點を越えて進歩したかを示すものではない。一典型が、有力になると、民族形成過程は、一形態及び民族性格の保守主義を涵養する。これ以上の進歩は、討議による政治の發達した國家、並に原則の問題が討議によつて遂行せらるゝ國家において、行はれるのである。野蠻並に未開社會においては、活潑な討論が行はれ、文明社會におけるよりも、言論の發達を見せてゐるところすらある。しかし、この討議は、たゞ特殊の集團の仕事であつて、一般原則の問題ではない。かくて、バジオットは、二つの範疇、即ち「慣習の凝結」と「討議の時代」とによつて、社會的進化が行はれることを論じたのである。而して、この慣習の凝結と典型の形成によつて、民族形成が行はれ、この發展が更らに、他の人間集團に賦課せらるゝことによつて、民族の擴大、即ち集團と制度との自然淘汰がありとした。この自然淘汰の最も重要な方法は戦争である。こゝにバジオットは、戦争または闘争の重要性を認めてゐる。(註一七A)

(註一七A) House, Development of Sociology, pp. 159-162

バジオットによつて採用せられた社會ダーウィン主義は、その後において、ベンジャミン・キットの「社會進化論」によつて受け繼がれ、(註一八)更にルトウィッヒ・グムブロウィッツによつて展開せられた。(註一九)これらの諸學

者は、一の征服の社會學を主張した點において、社會進化における戦争の意義を強調したものである。殊にグムブロウィッツは人種闘争を社會的進化における最も重要な要素とし、この闘争によつて、人類の歴史が形成せられると見たのであつて、現在においても、人種論者 殊に一人種の優越を主張する論者の經典と看做されるものは、その「人種闘争論」である。

(註一八) Benjamin Kidd (1858-1916) Social Evolution 1894

(註一九) Ludwig Gumplowicz (1838-1909) Rasse und Staat 1875 Der Rassenkampf 1883 Soziologische Staatsidee 1892

四

社會ダーウィン主義者は、何れも、その社會學的命題の中心要素として、闘争を置き、その本質的なものを戦争とする傾向がある。社會ダーウィン主義者の一々について見れば、その間に差異のあることは明白であるが、闘争を重要視した點においては、一樣である。しかし、この闘争と戦争とを同一視することは、もとより許し得ないことである。本節においては、戦争の本質を論ずる前提として、闘争の解剖を試みやうと思ふ。既に社會ダーウィン主義者の所説によつても明かなやうに、闘争は人間の一の基本的事實である。しかし、社會ダーウィン主義者、殊にトマス・ハックスレーの如きは、「最も弱き者、最も愚かなる者は死滅し、最も頑強なる者、最も狡猾なる者、よし他の點において、最善の者でなくとも、兎も角も、その周囲の事情と對抗するに最もよく適する者は生き残つて來た。人生は不斷の自由闘争であつた。そして家族といふ狭い一時的の關係以外では、ホップス流の總人對總人の

戦争が生存の常態であつた。(註二〇)といふ如く論断して、闘争的社會觀を高唱し、社會内における個人對個人または集團對集團の闘争並に人種的團體對團體の闘争の社會的進歩に對する貢獻を強調し、闘争または戦争中心の社會觀を提唱した。この説に對する社會學的反駁は、ピーター・クロボトキンによつて提起されてゐる。彼は生存競争の事實とともに、相互扶助の事實を注意する必要を論じ、生存競争・適者生存の社會學說の一の獨断であることを論じてゐる。

「されば、その後進化論と社會學との關係に注意を向けた時にも、私はこの重要な問題を取扱つた如何なる著述にも同意することが出来なかつた。それらの著述はすべて皆な人類は、その優秀な知力と知識によつて、人類間の生存競争の激烈さを和らげることが出来るといふ事を、立證することに努めてゐる。けれども同時に又、それらの著述はみな一動物と他のあらゆるその同類との、一人間と他のあらゆる人間との生存方法のための競争は「自然法」であると認めてゐる。しかし、私は此の説に同意することが出来なかつた。なぜかといへば、各々の種の中に生活のための容赦のない内亂が行はれてゐることを認め、且つこの内亂を進歩の一條件として認めるのは、私にとつては、まだ立證されない、しかも直接觀察の肯定を経ない事柄を認めることになるのであつた。」(註二一)

(註二〇) Thomas Huxley, *Struggle for Existence and its Bearing upon Man*, 1868.

(註二一) Peter Kropotkin, *Mutual Aid*. 大杉榮譯 相互扶助論 四―五頁

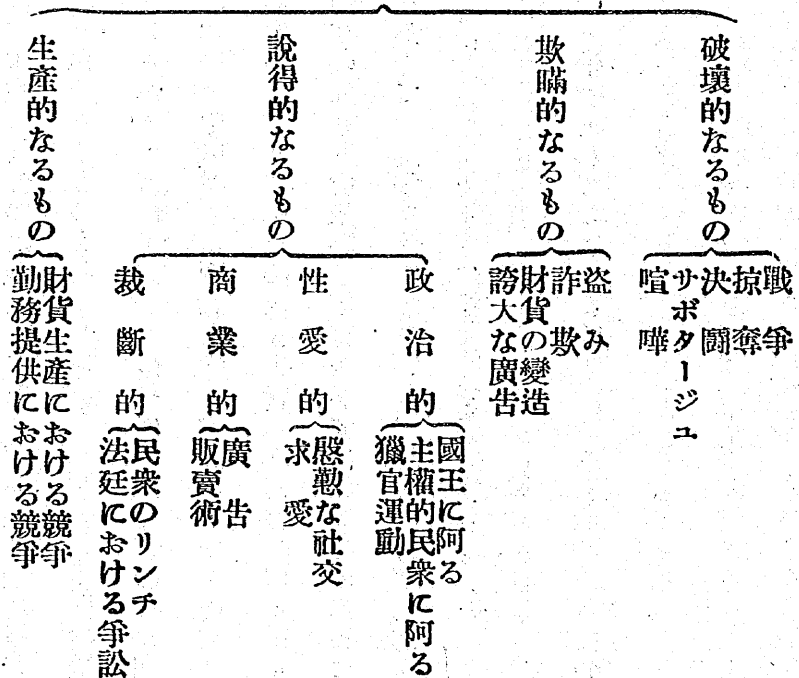
クロボトキンは、この命題を立證するために、動植物の世界と人類の歴史とを利用して、動植物においても、人間においても、その生存方法において、相互扶助の事實の存することを立證し、偏頗な社會ダーウィニ主義を否定したのである。この影響は、現在の社會學に現はれてゐる。現在の社會學者の中には、サムナーのやうに「人生の變遷」における強烈な競争を強調するものもあるが、(註二三)人間生活には、闘争・對立の要素のみでなく、調和の要素もまた充分に存在することが主張されてゐる。例へば、夫と妻の如き關係においても、それは調和、即ち相互扶助の關係であるとともに、その中に對立の要素を含んでゐるといふのである。(註二二)かくの如く、生存は調和と闘争との混在であるが、闘争の事實は、かくの如き事實を認めても、なほ重要である。而して、この闘争は生存競争の一方方法である。殊に現在の如き社會組織の下においては、闘争の事實は、寧ろ調和の事實よりも、重要であるといつてもよいであらう。かくて、闘争を論ずることは、社會の重要な部面の研究たるに至るのである。

(註二二) Sumner and Keller, *The Science of Society* 1927. Vol. I. p. 96.

(註二三) Thomas Nixon Carver, *The Essential Factors of Social Evolution* 1935. p. 43.

カアヅは、生存競争の手段としての闘争を論じ、それを次のやうに分類してゐる。

生存競争の方法



こゝにいふ破壊的なものとは、殺戮・傷害・肉體的傷害または苦痛の恐怖によつて、事柄の成功の手段とするものであつて、戦争・決闘・掠奪はみなこの範疇の中に入れられる。欺瞞的なもの、説得的なるもの、生産的なもの、

これらすべての闘争方法は、これらの能力によるのであつて、均しく生存闘争の手段である。(註二四)而して戦争は、かくの如き廣汎な闘争概念の一下種に屬するものである。

(註二四) Carver, Essential Factors of social Evolution pp. 76-77.

五

しからば、戦争とは何か。戦争が闘争の一下種概念であることは、明かであるが、その本質は何處にあるか。アルヴィン・ジョンソンは戦争を定義して、次のやうにいつてゐる。

「戦争といふ言葉は、普通に、人種・部族・國家または、それより狭小な地理的單位・宗教的または政治的黨派・經濟的階級の如き有機的結合と考へられる人口集團間の武装闘争に適用せられるのである。法律的に見て、完全にして無制限な主權を享有する國家間の武装闘争が近代思想においては、典型的な戦争として取扱はれてゐる。かくの如き國家内部における州・一地方・宗教團體・政黨・經濟的階級間の武装闘争は、その原初的情態において、平和の守護者であり、保證者である主權國に對する蜂起または反亂と定義される。而して、現實的または可能的な一勢力が、蜂起して、持續し、國家の全領域または一部分において、充分に國家の權威に挑戦し得るに至りたる時は、その闘争は内亂といはれる。」(註二五)

(註二五) Alvin Johnson, War in Encyclopedia of the Social Sciences Vol. 15, p. 331.

ジョンソンのいふところに従へば、有機的結合間の武力的闘争が戦争である。この定義は、戦争の形態としての

部分をよく現はしたものであるといへる。しかも、武力的闘争といふ點において、明瞭のやうではあるが、戦争の闘争としての本質が、何處にあるかを示してゐない。戦争の闘争である事實には間違ひはない。クラウゼウィッツ將軍が、「戦争の基本的要素とは、二者間の闘争、即ち決闘である。戦争とは畢竟するに決闘の擴大されたものに外ならない。即ち吾々は個々の決闘が無數に集り、それが一の統一ある全體をなしたものが戦争であると考へようとするものであるが、その場合二人の決闘者を想ひ浮べるのが便利だ。決闘者は何れも互に物理的な暴力を用ひて相手を屈服させ、以て自分の意志を貫かうとする、その當面の目的は、敵手を撃ち倒し、それによつてそれ以上の如何なる抵抗をもなす能はざらしめるにある。」(註二六)といつてゐるに徴しても、ジョンソンの言葉の誤りでないことを知ることが出来る。かくてクラウゼウィッツは戦争を定義して、「敵を屈服せしめて自分の意志を實現せんが爲に用ゐられる暴力行爲である。」(註二七)としてゐるが、この暴力は、「手段であつて、敵に吾々の意志をおしつけることが目的である。」(註二八) しかれば、この目的とは何であるか。クラウゼウィッツは、こゝに政治なる概念を持ち來るのである。即ち戦争は政治を動機とし、政治を遂行するための手段であると考へられてゐる。

「共同社會の戦争、即ち全國民間の戦争、就中開明國民のそれは、必ず政治上の状態に胚胎し、政治的動機によつてのみ喚起される。故に戦争は一の政治的行爲である。所でもし戦争が、先に吾々が、その純概念的性質から演繹しなければならなかつた如く、暴力の完全なる、阻害されることなき、絶對的發現であると假定すれば、よしんば始めは政治によつて惹起されたものにせよ、その一度び起るや、直ちにそれは政治より完全に獨立したものと

として、これに代り、これを押し退け、ひたすらに、その獨自の法則にのみ従ふに到るであらう。これ恰も一度び導火された地雷が、必ず豫定せられた方向を守つて、他に逸ることなきに似てゐる。これまで政治と戦争との間の調和が失はれた結果、理論上、兩者を區別する必要が起つた場合には、人々は實際斯様に考へるを常としてゐた。だが事實はさうでない。かくの如き考へ方は、根本的に誤つてゐる。現實世界の戦争は、先に述べたるが如く、決して一時に爆發して了ふ様な絶對物ではない。それは様々の力の作用である。それらの力たるや、互に完全にその種類を異にするのみではなく、又その發展の度合も一樣ではない。或る時は惰力と摩擦によつて與へられる抵抗力を打ち破る迄に膨脹するかと思へば、次には萎靡して何の作用も及ぼさなまいといった風である。されば戦争は、いはゞ、暴力の脈動と、でもいつたらよからう、それはある時は大なり小なりの激烈さを示すかと思へば、次には遅かれ早かれ、必ず緊張の弛緩と力の疲弊とが之に伴ふ。...

所で今戦争が政治的目的より出發したものなりとすれば、戦争を惹起せしめた此の最初の動機が、又戦争の指導に對しても、最も重要な働きを及ぼすべきはいふ迄もない。とはいへ政治的目的は、決して專制的立法者ではない、それは手段の性質に従はねばならぬ。屢々その爲に全然その性質を變ぜしめられることさへある。だが何れにせよ、それは第一に考慮されねばならない所の要素である。かくて政治は全戦争行爲に貫通し、戦争に於て爆發する力の性質が許す限り、之に不斷の影響を及ぼすものである。」(註二九)

(註二六) Karl von Clausewitz, Vom Kriege. 馬込健之助譯 戦争論 上卷 三一四頁

(註二七、二八) 戦争論 上巻 四頁

(註二九) クラウゼヴィッツ 戦争論 上巻 三二—三三頁

かくの如く論じ來つて、クラウゼヴィッツは、戦争の本質を次のやうに定義してゐる。

「こゝに於てか、吾々は知る、戦争が單に一の政治的行爲であるのみならず、又實に一の政治的手段たり、政治的對外關係の一の繼續たることを。然り、それは他の手段を以てするそれが實行に外ならないのである。」(註三〇)

(註三〇) クラウゼヴィッツ 戦争論 上巻 三二頁

クラウゼヴィッツは、戦争の本質を以上の如く規定してゐるが、他の言葉をもつていへば、「戦争は政治的交通の手段に過ぎず、それ故に、決して獨立なる力ではない。」(註三一)彼は、この命題を次のやうに説明してゐる。

「勿論戦争が諸政府及び諸國民の政治的關係によつてのみ惹起されるといふ事は、誰もが知つてゐる事である。然し人は普通この事を次のやうに考へてゐる。曰く、戦争の勃發とともに、かの政治的關係は中絶し、獨特の法則に従ふ所の全然異つた状態が成立するのであると。」

然し、吾々は之に對して、次の如く主張する。曰く戦争は他の手段を併せ用ひる所の政治的關係の繼續に過ぎないと。此處に吾々は他の「手段を併せ用ひる所の」といふ句を用ひたが、それによつて吾々は次の事を示さんと欲したのである。それは、此の政治的關係なるものは、戦争によつて中絶してしまふものでも、全然異つた他のものに變つてしまふものでもない事、否、それが用ひる所の手段が何であれ、その本質の不變である事、繼起す

る軍事上の諸事件を連載してゐる所の主要なる流れは、畢竟するに、戦争から講和に迄走つてゐる所の政治の姿に過ぎないといふ事これである。又それより以外に考へやうがあらうか。一體外交的文書の往復が途絶えたからといつて、諸國民諸政府の政治的諸關係も、亦途絶えてしまふものであらうか。戦争とは、要するに政治的諸關係の内容を、他の表現方法を以て發表したに過ぎないのではないか、成程そこには特別の文法はある、然し特別の論理はないのだ。」(註三二)

(註三一) クラウゼヴィッツ 戦争論 下巻 五五〇頁

(註三二) クラウゼヴィッツ 戦争論 下巻 五五一頁

筆者は嘗て、基本社會と相互作用の問題を論じて、人間の關係を相爲・相共・併存・對立の四形態とし、對立の關係をも結合構成的相互作用の範疇に入れ、これを除外せんとした學者に反對したことがある。(註三三)この場合、對立の相互作用として、最も激烈な戦争について次のやうにいつた。

「基本社會と他の基本社會との戦争は、一の對立の状態であつて、從來の兩者の關係の改廢を行ふための行爲に外ならぬ。即ち兩者の關係が併存關係にありとすれば、これに働きかけて相互作用關係に引き入れるための行爲に外ならぬ。又從屬支配の關係にあるものは、對等の關係を作り出さんが爲めの、又はその逆の關係を作り出さんが爲めの一特殊的結合状態に他ならぬのである。……」(註三四)

(註三三) 拙著 社會學序説 第八章參照

(註三四) 社會學序説 二二三頁

この場合筆者はクラウゼヴィッツを読んでゐなかつたのであるが、筆者の意味するところはクラウゼヴィッツの政治概念の導入と同じ意味のものであつた。クラウゼヴィッツは、兩戰國國の關係が外交文書の斷絶によつて、消滅するのではなく、戦争といふ他の手段によつて、兩國の關係の繼續せられてゐることを主張するのであつて、筆者が戦争を一の結合構成的相互作用に入れたのと同じ立場であると考へられる。たゞ筆者の場合には、戦争と政治との關係を明瞭にせず、政治を一般的結合構成的相互作用といふ概念の中に包含せしめたのは、明瞭を缺いてゐることは、勿論である。

クラウゼヴィッツの戦争本論は、戦争の社會現象としての本質を把握してゐる。それは、戦争なる現象を他の社會現象全體との游離的狀態において、また戦争を本質的に他の社會現象と異なるものとして、孤獨的な概念として取扱ないところに、その正確性がある。かくの如き意義において、クラウゼヴィッツの戦争本論は、現代の社會科學的檢討にも、なほ耐え得るものである。われわれは、このクラウゼヴィッツの戦争本論の規定を、歴史的に集積せられた材料と現在われわれの眼前に存在する資料とをもつて、實證し、且つこれを社會科學的に體系化することによつて、戦争社會學の體系を形成することが出来るであらう。

しかし、クラウゼヴィッツの戦争本論に對して、批判がないのではない。それは、總體戰爭論者からの批判であつて、クラウゼヴィッツの戦争本論の中核である政治と戦争との相互關係に對するものである。ルトデンドル

フは、「戦争の本質は變化し、政治の本質は變化した。従つて軍事的指導に對する政治の關係も變らねばならぬ。クラウゼヴィッツのすべての理論はふつ飛んでしまつた。戦争と政治は民族の生命の維持に役立つものであるが、戦争は民族の生存欲の高度の表明である。故に政治は軍事的指導に奉仕せねばならぬ。」(註三五)といつて、戦争の政治に對する優越を主張し、今日最早クラウゼヴィッツの理論の探るべからざる所以を論じてゐる。かかる立場は、わが陸軍省のパンフレットにも現はれてゐる。それにいふ。

「クラウゼヴィッツ將軍は、ナポレオン戦争を基礎として近代戦争を、國民戦争なりと解釋し、有名な「戦争論」を發表した。彼の名著「戦争に就て」の中に「戦争は他の手段を以てする政略の延長である」となし、「戦争は決闘の進化したもので」「敵を屈從せしめて、我が意思を貫徹せんがための暴力行爲である」と戦争の定義を下してゐる。しかし、彼自らが指摘してゐる様に、戦争の地盤ともいふべき社會状態が、其後著るしく發展變化して今日に及んでゐるために、戦争の本質そのものも變革され、クラウゼヴィッツの「戦争論」の中における戦争の概念では、今日の國防戦争を理解し説明することは出来なくなつて來た。

即ち近代の戦争は、單なる「政略の延長」とのみ解することは出来ない。又軍隊によつてなされる武力行爲だと考へることも出来なう。

近代戦争は、國家國民全體が關與すべきもので「國家國民の生存に於ける努力の極致」だと見るべきである。これを一言にして言へば「近代戦争とは、國家間の生存競争の白熱したものである」といふことが出来やう。(註三六)

(註三五) Ludendorff, Der totale Krieg. S. 115. ノーミン 前掲書 三七頁

(註三六) 近代國防の本質と經濟戰略

これらの批判は、クラウゼヴィッツに對して、何を意味するであらうか。クラウゼヴィッツは、引用文にも擧げられてゐるやうに、「社會的狀態及びその諸事情こそ、戦争の眞の地盤であつて、戦争は、これによつて條件づけられ、制限せられ、緩和される。けれどもこれらの事柄は、戦争そのものの屬性ではなくて、戦争そのものにとつては、それは一の與へられた事實たるに過ぎない」(註三七)といつてゐるし、また戦争形態の史的發展を研究して(註三八)次の如くいつてもゐる。「各時代の戦争には夫々独自の性質、之を制限する独自の條件があり、独自の制約を受けてゐた次第を明瞭ならしめんとするにあつた。従つて又結局晚かれ早かれ、普遍的な哲學的原則に基いて戦争理論を加工するべき義務があるとしても、各時代には夫々独自の戦争理論があるべき筈である。即ち各時代の出來事は常にその時代の特異なる性質との關聯において、判斷されねばならぬ。あらゆる瑣末事を戦々競々として研究するのではなく、大局を鋭く把握する事によつて、各時代の特異性を看破せる者のみが、その時代の將帥を理解し、評價することが出来るのである」(註三九)

(註三七) クラウゼヴィッツ 戦争論 上卷 五頁

(註三八) クラウゼヴィッツ 戦争論 下卷 四九八―五二六頁

(註三九) クラウゼヴィッツ 戦争論 下卷 五二五頁

かくの如く、クラウゼヴィッツは、明かに戦争の社會的基礎を認識し、その社會的基礎の上において、各時代が独自の戦争形態を有し、戦争理論を有することを認めてゐる。しからば、現代の戦争の本質は、第十九世紀以來約百年の發展によつて、根本的に變改されたであらうか。少くとも、その規模の擴大したことは、明かである。この點においては、一九〇五年の日露戦争と一九一四年に始まつたヨーロッパ大戦との間には比較にならぬほどの規模における擴大がある。歐洲大戦は國を擧げての戦争であり、來るべき戦争が、それ以上の大規模な戦争であるべきことも否定し得ない。この戦争規模の擴大によつて、總體戦争理論が構成せられ、廣義國防論が唱道された。現在のが國の組織は、準戦時體制の名の下に呼ばれてゐる。このことは、戦争の社會生活に對する比重の加重を示すものであり、國家體制または社會體制が、戦争を中心として構成されつゝあることを示すものである。現在この事實を否定するものはゐないであらう。しかし、この故にクラウゼヴィッツの戦争理論、殊にその戦争本質論の不用を主張することが出来るであらうか。クラウゼヴィッツはいつてゐる。

「戦争が政治に所屬するとすれば、それは當然政治の特質によつて特徴づけられる。政治が大規模でその威力が大であれば、戦争もまたそうなる。その程度には際限なく、かくて遂に戦争がその絶對的な姿に迄達する事が可能である」(註四〇)

(註四〇) クラウゼヴィッツ 戦争論 下卷 五五三頁

またいふ。

「政治的着眼點が戦争の開始と同時に中絶せねばならぬといふ場合が可能であるとすれば、それは戦争が全然單なる敵對的感情に由來する生死の鬭争たる場合に限られてゐる。然しありのまゝの戦争に就いて見れば、先に述べた如く、戦争といふものは、單なる敵愾心の發露ではなく、政治それ自體の表現に過ぎないのである。然りとすれば、政治的着眼點を軍事的着眼點の下位に置くのは不條理であるといはねばならぬ。蓋し政治が戦争を生んだのであるからだ。政治が主宰者で戦争は手段に過ぎない、その逆では決してない。然らば軍事的着眼點を政治的着眼點の下位に置く事のみが、可能なる唯一の方法である。」(註四一)

(註四一) クラウゼウィッツ 戦争論 下巻 五五五—五五六頁

かゝる見地から見れば、現代の戦争が大規模となり、國民の全部を擧げての戦争であるとしても、それは、政治の規模が擴大され、その擴大された規模に照應しての戦争の擴大である。一國の政治家の認識が、現代の國際政治の重大性に及ばず、戦争遂行者たる軍人がその政治規模の擴大(廣義國防)を要求されることは、あり得ることであり、わが國の如きは、これに顯著な實例を提供してゐるのであるが、その廣義國防の要求は、國際情勢の緊迫、即ち國際政治の重大性の理由からなされてゐる。而して、國際政治は一國と他國との相互關係であつて、各國の國內政治の表現でしかあり得ないのであるから——さう解釋しなければ、現實の國際政治は一の幽靈の如き存在になつてしまふ——戦争の規模が擴大したからといつて、戦争の本質を戦争それ自體に求めても、單に戦争の規模擴大といふ問題だけしか理解せられず、何故に戦争の規模が擴大されたかの一層深い原因は、これを政治に求めなければな

らぬ。さうだとすれば、クラウゼウィッツの戦争本質論——戦争は他の手段による政治の繼續であるといふ命題は、戦争に關する限りにおいて、その普遍的な本質であるといふことが出来る。このことは、戦争の性質の同一性の主張ではない。否、上層社會現象としての戦争の本質は、政治によつて規制せられるといふのである。即ち社會生活全體との關聯において戦争現象を探究したに外ならぬ。クラウゼウィッツが、「半開明的なりし韃靼民族、古代の諸共和國、中世紀の封建領主及び商業都府、十八世紀の諸國王、最後に十九世紀の諸君主及び諸國民は、何れも獨特の仕方で戦争を行つてゐる、その手段やその目標は夫々に就いて異なるのである。」(註四二)といつてゐるのは、正しいし、その理由は、それらの時代及び政治的要素の政治に差異があるからである。現代の戦争の規模擴大も、その政治的基礎の擴大に基いてゐる。植民地再分割の問題・世界資源の分配問題・貿易對立の問題・廣汎な植民地並に半植民地國の民族運動・コムメンテルンの世界赤化運動などの國際政治における重大問題が、現代の軍備の急激な擴大を要求してゐるのであるとすれば、クラウゼウィッツの戦争本質論は現代においても、適用するし、かく見るこ

(註四二) クラウゼウィッツ 戦争論 下巻 五〇七—五〇八頁

六

クラウゼウィッツの戦争本質論は、戦争の歴史性に照して考察するとき、その眞實性を増加するといつてよい。社會現象としての戦争は歴史性を有する。この歴史性を強調し、これを認識することによつて、戦争社會學の成立

とその対象としての戦争を理解し得るのである。戦争が闘争の一特殊の形態であることは、既に説いた。而して、闘争現象を社会進化の中心的要素とする社会ダーウィニ主義者は、戦争の普遍性を主張する。即ち人類のあるところ、戦争ありといふ命題を樹立してゐる。ウォルター・バジオットは云ふ。

「何人も戦争に與へられた優越性について驚いてはならぬ。われわれは初期の時代を論じてゐる。民族構成はこの時代の人類の仕事であつた。而して、民族を作つたものは、戦争である。民族の變改は、その後に来つたものであつて、平和的革命によつて行はれたものである。その時においても、戦争は、それ相應の役割を演じたものではあるが。破壊を行はない民族の觀念は、近代の觀念である。初期の時代においては、すべての民族が破壊的であつたし、われわれが過去に遡れば、遡るほど、破壊の作用は常時不斷のものであつた。諸民族の内部的裝飾は第二次的過程であつて、民族を創造した主要な勢力が主としてその仕事をなし遂げた時代に續いて起つたのである。」(註四三)

(註四三) Walter Bagehot, *Physics and Politics*, Kegan Paul's Edition, p. 77.

ハッバート・スベンサーもバジオットと同じ立場にゐる。彼は神話を研究して、「野蠻人並に未開人の生活においては、戦争が主たる出来事である。故にインド・ギリシャ・バビロニア、メキシコ、ポリネシアなどの神話の共通の性質は、天地創成の出来事をも含めての物語りされる行動は、闘争の形態を採るものである。」(註四四)といつてゐる。ハヴェロック・エリスの如きも、サー・ヘンリー・メインの「原始人類の一般的好戦性」に賛意を表し、「自然的で

あり、原始的であり、古代的であるのは、平和ではなくして、寧ろ戦争である」といひ、戦争が現時における激烈あることを指摘してゐる。(註四五) オランダの社会学者ルドルフ・シュタインメッツは、その大著の中で、スベサーに同じて、以下に論すべきペリーの原始人の平和状態に反對し、人間が本能として好戦的であり、原始人もまた勇敢に戦争に従事してゐた點を強調してゐる。(註四六)

(註四四) Herbert Spencer, *Principles of Sociology*, Williams and Norgate's Edition 1906 Vol. I, p. 822.

(註四五) Havelock Ellis, *Philosophy of Conflict*, pp. 42-43.

(註四六) Rudolf Steiner, *Soziologie des Krieges* 1929, *Zweites Kapitel*, S. 18 ff.

モウリス・デヴィの如きも、その立場を同じくしてゐる。

「最も初期の時代から現在にいたるまで、人類は常に闘ひ、常に自然的及び人工的武器を持つてゐた。それでもつて、人間は、その闘争を決したのである。この結論を支持しつゝある諸種の證據の中で、書かれた歴史は、人間が常に大業に戦争に従事してゐたことを明かに示してゐる。文字の知られてゐない時代から傳へられた傳説もまたこのことを示してゐる。傳説は一部神話的是であるが、部分的には、歴史的である。従つてそれは、眞實の記憶と神話的幻想の混合である。比較神話學の研究は、初期の人類に關する多くの疑ふことの出来ない事實を與へたのである。」(註四七)

(註四七) Maurice R. Davis, *The Evolution of War. A Study of its Role in Early Societies*, 1929, p. 1.

デヴィはかくの如くいって、戦争の進化、即ち初期社会における戦争の役割に關する三百頁の著作をなすに至つたのである。人類と戦争とを、その本能から解釋するのは、マクデュカルの如き社会心理學者であるが(註四八)人間の生存を闘争と解するものは、既に擧げた社会ダーヴィン主義者であるが、デヴィの如きも、その一人である。彼はいふ。

「原始人が武器を使用したことは、極めて自然である。何となれば、食物の探究の後において、その最大の必要は、自身を護ることだからである。」野蠻人は、彼を襲ふ野獸を追拂つて、これを狩り、これを亡ぼさねばならなかつた。しかしながら、彼の最も危険な敵は、同じ人間であつた。かくて、文明の知られてゐる最低段階においても、戦争は既に始まつてゐた。それは、野獸に對して用ゐられた同じ棍棒・槍・弓でもつて、人間に對して、行はれたのである。』最も初期の武器は、疑ひもなく勝手に拾ひ上げられ、必要のあつたときの棒や石であつた。類人猿でさへ、彼を攻撃しやうとするものに對して、棒を用ゐ、石を投げるのだから、原始人がその自己防衛において、この過程を取つたものと思はねばならぬ。(註四九)

(註四八) William McDugall, Group-mind.

(註四九) Davie, op. cit. p. 3.

デヴィは原始社会の結成原則の一つが戦争であるといつてゐる。

「内的集團の構成員は、物質的利益・血縁・共同言語・宗教習慣の共同性によつて結合されてゐる。原始人によつて

認められる最も根本的な關係は、血のそれである。多くの場合血縁なきものは外國人であり、敵である。原始社会は、實に二つの主要な原則の上に組織されてゐるが如くである。唯一の有効な紐帶は血の紐帶であるといふ原則。社会の目的は攻撃並に防禦の戦争のために團結しなければならぬといふ原則がこれである。(註五〇)

(註五〇) Davie, op. cit. p. 17.

かくの如くして、戦争と人類との關係を極めて密接な不可分なるものとして闘争社会觀は成立する。デヴィの著書の如きは、社会ダーヴィン主義者の前提を原始社会における多數の「事實」によつて基礎づけたものであつて、かかる種類の主張としては、典型的なものである。これらの主張において、批判せらるべき點は、第一に人類の闘争と戦争との混同である。既に記したやうに、戦争は闘争の一下種概念であつて、政治と深く結びついてゐるものである。動物との闘争または恐怖・憎悪による殺傷の如きが行はれたとしても、それは戦争の範疇に入らない。第二には、人類原始の段階に關する問題であるが、野蠻・未開人の間においても、既に政治現象を有する集團もあれば、いまだその段階にまで發展しない集團もある。これらの諸段階において行はれる諸種の闘争の事實を、そのまま蒐集して戦争なる事實の存在を證明しやうとするのは、當を得てゐない。原始人類に關する事實は、もつと整理されて考察されねばならぬ。第三には、これらの原始社会戦争說に對して、有力な原始社会平和說があり、これは充分に評價せられる價值を有するのである。

原始社会平和説は、以上の原始社会戦争状態論に對立するものである。この兩説の對立は、社会契約説における對立以來のものである。社会契約説において、社会契約成立以前を自然状態といふのであるが、この國家成立以前の自然状態に關して、それが平和的なりや、あるひは闘争的なりやについて兩説がある。トマス・ホブズは、その有名な「レヴィアサン」において、自然状態においては、人間の自利心は何等掣肘せられない活動が許されてゐるので、この状態の下においては、「すべての人のすべての人に對する闘争」が展開せられる。しかし、かゝる自然状態の下においては、充分な自利心の満足をなし得ないことから、原始的自然状態の放棄・社会契約の成立となつて、國家主權の下に人民が服従するに至るのである。(註五一)これに對して、人類の自然状態を平和的なるものとし、人類は、この平和状態から文明の進むに従つて闘争的墮落的状態に陥つたとする説がある。それは、ジャン・ジャク・ルッソの説である。ルッソは人類の黄金時代を、靜かなる初期共同生活の時代に求めた。この黄金時代の樂園から、人類はその文明によつて墮落の一路を迹つたものであつて、この人類の樂園を急激に破壊したものは、詩人のいふやうに金銀そのものといふよりは、寧ろ鐵と穀物であつた。彼は、人類の墮落の制度的表現を土地私有別に求めたのである。(註五二)

(註五一) W. Graham, English Political Philosophy p. 9 註 拙著 社会學成立史 九五頁以下

(註五二) J. J. Rousseau, A Dissertation on the Origin and Foundation of the Inequality of Mankind, English Translation by G. D. H. Cole pp. 205-215

いま、こゝに問題とするのは、かゝる思辨的な主張ではない。人類原始社会において戦争が一般的であつたと主張する議論が、多くの實在的資料によつて主張されてゐることは、既に記した如くであるが、原始社会平和説においてもかゝる實證的根據によつて、これを主張するものがある。而して、原始社会の平和状態については、積極的主張をなさないでも、戦争の歴史性、その起源についての社會學的説明を與へるものがあるが、これらはすべて人類原始社会平和説の主張者と見ることが出来るであらう。この原始人類平和説は、人類遺跡・歴史・現存の低度文化人の状態などから實證的に主張されてゐるのである。

ハヴェロック・エリスは新石器時代について、次のやうに記してゐる。「過去半世紀の間に、新石器文化の秘密の解明に多くの寄與をなした中央ヨーロッパの大湖上都市は好戰的ではなく、彼等は人類史上における最も幸福な時代を代表するものといへやう。彼等は、戦争に對する思索を準備しつゝあつた、しかし彼等はいまだ戦争の方法を發展せしめてゐなかつた。彼等が金屬を發見し、鑛石を溶解する方法を發見したときに、戦争は來つたのである。(註五三)初期の歴史的記録は、原始民の平和的性質に關する多くの證據を含んでゐる、紀元前千九百年から一七五〇年に至るクレイト文化中期時代の「前王朝エジプト人は、また明かに平和的であつた。」(註五四)而して、「この文明の支配的な平和的性質は、クレイト都市が城廓を繞らしてゐない事實によつて示されてゐる。」(註五五)ヨーロッパの新石器時代の農民の間においては、「社会は後代におけるやうに、戦争のために組織されてゐなかつた。そこには、軍事的階級がなかつた。プレステッド教授の指摘するやうに、舊王國のエジプト人は、本質的に好戰的ではなかつた。」

(註五六) ヨーロッパ並に近東における新石器時代の末期においては、好戦的侵略並に耕作生活における大變化が起つた。「スマアの都市國家またはナイル河畔の初期の國家においては、戦争がなかつたのではない。しかし、それは例外的であり、いふに足らぬものであつた。」(註五七) 僧侶(ドルイド)の治下にあつた初期ゴール人の生存は注意に値する。「ドルイド」的社會は、平和に生活してゐた。宗教の力と農業労働の緊密さが、彼等の間に家族を結成せしめ、正規的農業生活をなさしめたのである。これらの五百人の王の間に何等の鬭争も、戦闘もなかつたと考へることは、馬鹿氣なことであらう。しかし調和の必要は、人々の間における最も緊要なことであつた。彼等を命令した土地と僧侶とは、調和の主であつた。(註五八)

(註五三) Ellis, *Philosophy of Conflict*, p. 49.

(註五四) W. J. Perry, *Growth of Civilisation*, p. 196.

(註五五) Dawson, *Age of the Gods*, p. 180.

(註五六) Dawson, *Age of the Gods*, p. 238.

(註五七) Dawson, *Age of the Gods*, p. 238.

(註五八) Julian, *De la Gaule a la France*, p. 120.

食物蒐集の生活段階にある現代の低度文化人の平和的性質に關しても、多くの證據が擧げられる。セイロンのゾダ並に南インドの原始林住民のあるものは、アリヤン以前の人種であるが、「彼等は血縁共同体を組織して、岩窟の内に生活し、各共同体は、その狩獵地を有する。彼等は著しく平和的である。」(註五九) アフリカの大湖地方の南部

並にコンゴ地方においては、ブッシュマンもネグリトともに狩獵者であるが、「ブッシュマンは、その純粹な状態においては、決して攻撃者であつたことはないやうだ。…彼等は相互に決して大戦争をやつたことはないやうである。競争してゐる狩獵者間における突然の争ひは、活潑な小競合に終つてゐるが、彼等の個人の、または部族の相異の範圍で行はれてゐるやうである。しかし、常習的な喧嘩好きな男は、彼等の間では許されないのである。」(註六〇) 太平洋諸島の蠻民の中で「文化的繼續が確立されてゐるところでは、その初期の時代が一層平和的である。ポリネシア的社會の崩壊は、いまでは容易に理解される。諸共同体が、その平和的な慣習を捨て、大規模な戦闘を行ふとき、注意が一職業から他のものに移る。太平洋諸島においては、戦争の發達は、藝術及び工藝における文化的衰退と一致する。かくて、戦争は物質的文化の見地から見ると、多くの論者のいふやうに、力の表徴として見るべきものではなく、反つて衰退の表徴として見るべきが正當である。同じことは、アメリカについても、いはれる。」(註六一) ドウソンは、初期食料蒐集族の平和的性格について、次のやうにいつてゐる。「戦争状態または殺戮に應じた諸時代があつたにも拘らず、現代においてすら、食料蒐集段階の最も原始的な人々は、著しく平和的である。」(註六二) 而して、ドウソンは、原始人の平和的性格の實例を擧げて、「最も好戦的なものは、比較的文明化された種族である」といつてゐる。原始人の好戦性について、確信し、社會ダーウィン主義者の一人であるハアバート・スペンサーさへ、初期食料蒐集段階における蠻人の平和性について認め、平和的種族の實例を擧げ、彼等はその數において、少數であり、産業もなく、協同的で強壓的でないことを認めてゐる。(註六三) スペンサーの擧げたエスキモーの平和的

性質については、フリドリッヒ・ラッツェルも「戦争や闘争は、エスキモーの間には知られてゐない。彼等は、戦争といふ言葉を持つてゐない。彼等は叱ることもしなければ、罵ることもない。女は男と同等であるし、社会階級もなく、財産は共有である。」(註六四)(註六五)

(註五九) Perry, Peaceable Habits in Primitive Communities Hibbert Journal XVI p. 37.

(註六〇) Slow, The Native Races of South Africa. p. 38.

(註六一) Perry, The Children of the Sun. pp. 158-159.

(註六二) Dawson, Aeg of the Gods. p. 239.

(註六三) Spencer, Principles of Sociology Vol. I p. 509.

(註六四) Friedrich Raetzl, History of Mankind. Vol.II. p. 211 ff.

(註六五) Scott Nearing, War. pp. 71-77. Emanuel Kanter, The Evolution of War. p. 28. ff.

かくの如き原始人の平和的性質を主張する者は、多いが、その中で最も優れたものは、ホルステイとペリーであらう。筆者はホルステイの著作について、見ることを得なかつたのを遺憾とする。(註六六)しかし、ペリーについては、その大體を知ることを得たので、次節にこれを論じやう。

(註六六) R. Holsi, The Relation of War to the Origin of the State. 1913.

八

ペリーは、既に引用した諸著において、原始人の平和性を論じてゐるが、原始的平和共同体から戦争の起源及び

その理由を論じたものに、小冊子「戦争と文明」がある。(註六七)

(註六七) W. J. Perry, War and Civilization A Lecture delivered at the John Ryland Library on the 13th February, 1918. Manchester at the University Press. 1918.

ペリーは人間生活の根底を本能に置いてゐる。本能は人類進化の過程において獲得せられたもので、人類の生活において根本的な役割を演じてゐる。しかるに人間は、この本能の外に、その社会共同生活における環境の影響を受け、これが種々の行動の形態として現はれる。この本能と生活過程において獲得せられた傾向との間には深い差異がある。本能は全人類に存するものであり、獲得傾向は、一定の段階の社会生活において現はれるものである。故に一の行動が全人類的であり、全時代を通じて行はれるとすれば、この種の行動は本能的であるといひ得る。これに反して、一行動がある種の人々により、ある特定の条件の下に行はれるとすれば、その社会的起源は、説明し得るものである。(註六八)

(註六八) War and Civilization, pp.5-6.

この一般的原則の下に、文明の進歩における戦争の役割を論ずるのが、ペリーの任務である。第一に好戦民とは何か、戦争とは何かの問題がある。好戦民とは、他を攻撃するものを意味し、攻撃せられた場合防禦するものを意味しない。攻撃を受けた場合における防禦は、自己保存のための行動であり、人類における一般的傾向である。従つて攻撃に對する防禦は、本能的であるといへる。攻撃の行動は、著しくこれと異つてゐる。攻撃的戦争が、人類

社会のすべての形態の共通の性質でないことは疑問の余地のないところである。

「過去半世紀を通じて、人類社会の初期段階に對するわれわれの知識は非常に増大して、これらの時代における手藝品の多くが、われわれに知られるやうになり、従つて、ある程度までの成功をもつて、この時代において、彼等が如何なる人間であつたか、如何なる生活をなしてゐたかを想像し得るのである。石器時代の初期の生産物の研究は、武器の形態においては、何も現はれてゐず、單に一般生活用の器具に過ぎない。石器時代の後期の諸時代を通じて、摩擦、切斷、穿孔のための道具は、多數であるに拘らず、武器は著しく少ないのである。ヨーロッパにおける舊石器時代の後葉期の鍬の如きは、野鼠以上の大きなものを殺せぬ程度のものである。初期石器時代の人々も、闘争のための武器を作る能力はあつたらうし、またその技術の熟練は容易に、尖鋭な燧石を恐るべき武器とすることが出来たであらう。初期石器時代における武器の皆無状態は、この時代においては、闘争、個人的闘争さへ、知られてゐないのであり、またあつたとしても、無視してもよいほどに、稀れであり、無害なものであつたことの有力な證據をなすものである。」(註六九)

(註六九) War and Civilization, p. 6.

これらの歴史的證明で、戦争の歴史性を明かにすることが出来るのであるが、幸にして、初期文化段階を代表する現存人がある。

「彼等は、その純粹な状態においては、如何なる形態の文明をも有してゐない。彼等は狩獵者である。彼等は家

を作らず、衣服を纏はず、金屬も使用せず、彼等の死屍をも處置せず、死せる處にそのままにして置き、社會階級もなく、その財産を共有にする血縁共同體の中に生活する。かくの如き人々は、南部インド・セイロン・シベリア・北米・南米・東インド諸島・オーストラリア・アフリカ並に北部ヨーロッパにおいて、發見することが出来る。これらの人々は、すべて高級の文化的影響を受けぬ場合には、全然平和的である。故に、かくの如き人々の存在は、行動の戦争的形態が人類の一般的様相でないことを證明するものである。」(註七〇)

(註七〇) War and Civilization, p. 7.

従つて、ペリーは、次のやうにいふのである。

「石器時代の初期的段階に武器が全然存在せぬこと、並に、狩獵民によつて示されてゐる平和的行動と文化状態との密接な關係とは、すべての人類が一度は平和的であり、ある種の人々は、狩獵的段階から何かの理由で好戰的となつたことを暗示するものである。」(註七一)

(註七一) War and Civilization, p. 7.

かくの如く、ペリーは、人類の初期石器時代における一般的平和生活の存在を認めることによつて、戦争の歴史性の問題に入つてゐる。即ち戦争の起源の問題がこれだ。ペリーは、この問題を實證的に取扱つた。彼は、アフリカ・アジア・南北アメリカ・ヨーロッパについて、歴史的研究によつて、戦争起源の問題を説明しやうとしたのである。ペリーは、戦争なるものが、一部特定人群の行動によつて起され、その結果として、支配者對被支配者の關係

を生み、更らにかゝる過程を続けることによつて、戦争の規模が擴大されることを主張してゐる。而して、一部特定人群といふのは、軍事的貴族階級を意味するのである。ペリーは、廣く以上の諸地域を研究して、好戦民の起源に關して、次のやうな一般的結論に達してゐる。

「その起源の知られてゐる好戦民は、共通の特性を持つてゐる。アフリカにおいては、好戦的ネグロ族の支配者は、地圖に示された中央部(ツアナ湖と紅海の出口を半經とする地方、いまのエチオピア——筆者)から進出して來た皮膚の色の淡い人種である。インドにおいては、アリアン人は、彼等が征服した土着人と人種において、著しい差異がある。人種の混合から起つて來たカスト別は、職業とともに、肉體的特性によつて特徴がある。上級カストの所屬員は、皮膚の黒い下級カストの所屬員よりも、皮膚の色は淡く、身長は長い。中央アジアにおいては、イラニア人種に屬するものは、蒙古族を祖先とする征服王朝によつて支配せられ、蒙古族中においては、諸國における王朝は、知られてゐる限りにおいては、外部人種の出身である。……ヨーロッパにおいては、トルコ人並にマヂャール人の如きは、全然別種の人種の民を征服した軍事貴族の好例である。……これらの貴族は、豫期せらるゝやうに、社會の他の部分よりも優秀なことが證明された家族から成るのではなく、平和的慣習を持つてゐるものとして知られてゐる人民に、その支配を押しつけた好戦的外人の子孫である。」(註七二)

(註七二) War and Civilization, p. 15.

而して、これらの好戦的民群の居住地域は、古代帝國の近傍地域に屬してゐる、即ち、支那における揚子江上流地域、滿洲、バイカル湖附近、アフリカにおいては、ツアナ湖一帯、及びモロッコ地方、ヨーロッパにおいては、バルチック海沿岸諸地方、北米においては、ミシシピイ河を中心とする地域、南アメリカにおいては、その中部である。これらの軍事貴族の中心地から古代帝國地域に侵入し、これを樹立したものである。これらの軍事貴族の發祥地は、その數において少數である。しかし、これらの諸地方は、古代民によつて、特に、尊重好愛せられた物資の生産地である。即ちアフリカにおける金、バルチック海沿岸地方における琥珀、滿洲における金、南米中心地の金などである。これらの金・琥珀・眞珠の如きは、古代においても、尊重され、一種の價値の標準となつたものである。殊に金が一般的價値標準となつたことは、これらの好戦民の活動を大ならしめた。彼等は金を求めて、諸地方を征服し、その天産の豊なることによつて支持されてゐた自分達の文化を更らに、平和的生活をしてゐる人々に武力的に押しつけるのである。こゝに征服者としての外人支配者の權力が確立される。(註七三)征服者の求めるところは、これらの貴重な物質である許りでなく、富を生産する人口も、その征服対象となる。即ち、軍事的貴族は一方において、金などの貴重物資によつて、自己を富ましめるのみでなく、人口の増大によつて、これらを支配し、物資を生産せしめることによつて、階級的權能と安樂とを増進せしめやうとするのである。ペリーは、初期の社會における戦争の理由をかくの如き點に求めて、その結論に達してゐる。彼はいふ。

「富のあるところ、並にそれを生産する人々の存するところには、軍事冒險者が、遅かれ早かれ到達して、自分達のために安樂と奢侈を獲得しやうと専心し、その従順な人民をその目的に對する手段として用ゆるのである。」

富の存在が巨大であれば、競争は激甚を極め、ある支配的な家族が勝つか、競争してゐる王朝が、相互に損傷して、その占有のために闘つてゐる地域を荒廢たらしめるまで、戦争に次ぐに戦争をもつてすることもある。…かくて、戦争は、その起源を、移動する軍事貴族に有する如くである。彼等は、その欲する形態において富を生産する人口の存するところに、移住し、社会的寄生の生活を送る。彼等は、その人民を強制して、彼等に衣食住・娯樂を提供せしめ、軍隊の組織を強制せしめる。この軍隊によつて、彼等の競争者との闘争、または周囲の人民の富を獲得し、これを支配することに對して、彼等を援助する。その人民は、無價値のものであり、彼等の意志を實行し、彼等の快樂に奉仕するものであつて、戦争の運命の決するに従つて、疑問もなく、一の支配者から他の支配者に移るものである。(註七四)

(註七三) War and Civilization, pp. 16-22.

(註七四) War and Civilization, pp. 24-25.

要するにベリーの立場は、戦争を一の社會現象として、その歴史性を認識せんとするものである。而して、彼は戦争を外部的人種の侵略行動として、解するものである。この點において、彼は、戦争の一社會における必然性を認めるや否やを明確してゐないが、この點は、彼の認識の明確ならざる點である。戦争をもつて、好戦民の平和民への征服とする點で、彼の所説は、人種闘争説の先驅者の説に一致する點がある。

九

ベリーの戦争起源説と殆んど同一の立場に立ちながら、これを一層社會學的に組織したものは、フランツ・オッペンハイマアであらう。(註七五)オッペンハイマアの國家論は、ルトキッヒ・グムプロウィツの「社會學的國家論」をその根據とするものであり、國家成立の社會學的考察として、社會學における科學的研究の代表的なものである。(註七六)

(註七五) Franz Oppenheimer, Der Staat 1912. Der Staat. System der Soziologie. Zweiter Band 1926.

(註七六) Ludwig Gumplowicz, Die Soziologische Staatsidee 1902.

オッペンハイマアは、國家の成立の事實を人間の生存本能に求め、この生存本能を充足すべきためには、自然と人間の闘争を第一義とする。即ち人間が自己労働をもつて、自然に働き掛けることによつて、自然から生活に必要なエネルギーを獲得するのであるが、この過程の組織が社會である。しかしながら、人は、直接自ら自然に働き掛けて、欲望充足資料を獲得するのみではない。オッペンハイマアはいふ。「いたるところ同等にはたらく、生活衝動に動かされる人間は、二個の根本的に對立する手段をもつて、必要な欲望充足の資料を獲得し得るのである。労働と掠奪、換言すれば、自己の労働と他人の労働の成果を暴力的に奪取することこれである。」(註七七)而して、オッペンハイマアは前者を経済的手段、後者を政治的手段と名づけるのである。

(註七七) Oppenheimer, Der Staat. S. 16. オッペンハイマア、國家論(改造文庫)

オッペンハイマアは、この生活必要資料の獲得における政治的手段の實現に戦争の起源を求めてゐる。オッペン

ハイマアによれば、原始農耕民と牧畜民との併存対立の存在する場合、闘争に勇敢な牧畜民が、平和的な原始農耕民に對して、攻撃を開始することに、戦争の起源が求められる。而して、この戦争によつて、牧畜民は農耕民をその支配下に置き、所謂政治的手段によつて、その生活資料を獲得するのである。オッペンハイマアによれば、「原始的農耕民の社會構成は、狩獵民の群團と同じやうに、まだ殆んど國家に似たものではなかつた。農耕民が釋で土地を耕しながら、自由な境涯に生活してゐたところでは、まだ國家は存在しなかつた。原始農耕民は互ひに孤立してゐて、個々の棲家に恐らくは、村落に廣く散在し、そして部落や、耕地の境界争ひのために分裂させられてゐたので、彼等はたかだか緊りのない盟約團體のうちに生活してゐて、その集團生活は同一の血統や言語や信仰やの意識で強く結びつけられてゐたに過ぎなかつた。」(註七八)しかるに、牧畜民にあつては、「彼等が孤立的に散在してゐる場合でも、國家構成の全要素が見出される。實際いくらかでも進歩した牧畜民は、既に國家を殆んど完全に作り上げてゐたのである。たゞその國家には、近代的意味における國家概念を完全に充たす最終の特徴たる強固に區劃された國家領土内における國民の定住生活が缺けてゐただけである。」(註七九)

(註七八) Oppenheimer, Der Staat, S. 19.

(註七九) Oppenheimer, Der Staat, S. 21.

かくの如き牧畜民の間にあつては、その環境と各個人の牧畜技能の差異は、比較的早くその畜産物における數量的差異を發生せしめ、この所有の差異が、社會的分化を惹起し、指揮者と従屬者との社會的區別が發生する。かく

の如き社會的區別の發生が、所有といふ權力を發生せしめ、この權力の擴大のために他の社會への侵略が行はれる。この侵略の實行せられる場合、その對象となるものは、一方には狩獵民があるが、主として農耕民が侵略を受ける。オッペンハイマアは、この過程を次のやうに記してゐる。

「狩獵群團の個々の戦員達は、牧畜民に比べるとその數も少く、その力もずつと弱いのである。彼等が時折り牧畜民と衝突することがあるとしても、その襲撃に對抗することの出来ないのは當然である。そこで彼等は高原や山地に逃れて行くのであるが、こんな場所には、家畜の飼養場が見當らないので、牧畜民は、また彼等を征服して、一種の食客のやうな關係にひき入れることもある。そして、かういふ現象は、特にアフリカにおいては、蒙昧時代この方屢々見受けられたことである。…けれども彼等は「實際上の無政府主義者」であつて、規則正しい勞務に強ひられるよりも、反つて殺されるのを喜んでゐる。だからこんな風の衝突から「國家」は決して發生しなかつた。また農耕民は、實戦に訓練されてゐない個々の戦員から成る。彼等の未訓練な土着兵を以つてしては、たとへ、彼等が非常な多數で戦ふ場合でも剛健な牧畜民の襲撃に長く抵抗することは、出来ない。しかし、農耕民は逃亡しない。彼等は飽くまで土地にくつついてゐる。そして、彼等は既に規則正しい勞働に慣れてゐる。彼等は土地からはなれないので、服従させられてしまふ、自分たちの征服者に税を拂はされる。以上は舊世界における領土國家の發生過程である。」(註八〇)

(註八〇) Oppenheimer, Der Staat, Ss. 32-33.

かゝる過程即ち牧畜民による農耕民の征服過程において國家は成立し、戦争の発生を見たとするのが、オッペンハイマアの説である。彼の征服國家説は、既に記したやうに、グムプロウィッツの人種闘争を基礎とする社會學的國家觀の一適用と見るべきものであるが、オッペンハイマアは、ラッツェル、リッペルトなどの原始人類に關する叙述を最も巧妙に利用したものである。(註八一) しかば、オッペンハイマアが戦争の起源を考へてゐる時期は如何なる段階であるか。人類發展の段階を野蠻・蒙昧・文明の三期に分つのは、ルイス・モルガン以來多く採用せられてゐる。(註八二) 人類の書かれた歴史は、蒙昧の最終期または文明の初期であると思ふことが出来るであらう。オッペンハイマアの所論の如き事實の起つたのは、蒙昧の末期であつて、人類の群中、並に群の間に對立の起つた時代である。この對立の發生は、生活必需品の生産の方法並に生産成果の蓄積の程度によつて、必需品に對する經濟的手段とともに、政治的手段が採用せられるのであつて、この時に對外征服が行はれるのである。従つて、一社會の内部的發展が、對外發展の條件となるのである。故に對外發展の二様相である戦争は、内部關係の發展及び矛盾の對外的解決であるといふことが出来る。

(註八一) Friedrich Raetzl, *Volkerkunde*, 2 Bde. *History of Mankind*, 3 vols.

(註八二) Lippert, *Kulturgeschichte der Menschheit*, 2 Bde. Lewis Morgan, *Ancient Society*, 1872

かゝる見解は、戦争を本能に歸せしめるものではなく、反つて、一社會的歴史的现象とも理解しやうとするものである。従つて、クラウゼウィッツが戦争の本質を「他の手段による政治の延長」に求めたことに一致するので

ある。クラウゼウィッツは、近代戦争から戦争の本質をこゝに求めたのであるが、ペリー、オッペンハイマアなどの所論は、かくの如き戦争の本質が、初期人類社會においても、發見し得ること、並に、政治の延長としてのみ、戦争の本質が理解せらるゝ點を、戦争の始源的形態において、實證的に論證したのである。この點において、これらの論者は、クラウゼウィッツが、半ば直觀的に認識した戦争の本質を社會學的に認識し、戦争社會學の出發點をこゝに置いたものといふべきである。

これらの論者は、戦争の本質を、かゝる社會現象の中に求めたのであるが、これは戦争を呪詛するためではない。ペリーの如きは平和主義者なるかの如くであるが、彼が平和主義者であることとその戦争本質論とは、何等關係のあることではない。何となれば、平和主義は、一の理想であり、戦争本質論は、現實の事實だからである。われわれは戦争をわれわれの理想としても解釋し得る。しかし戦争社會學においては、個人の主觀的理想とは、別に、社會的現象としての戦争を見なければならぬ。戦争が如何なる現實的客觀的基礎の上に、展開されてゐるか、その戦争の目標とするところは、現實的條件においては、如何に翻譯せらるべきであるかを研究せねばならぬ。この點において、戦争社會學は、解剖學者が人體の解剖を行ふ如く客觀的である。たゞ、戦争なる現象が、一の意味を有する點において、戦争社會學は、物理的事實以上の意志の解剖をも行はねばならぬことである。而してこれらは、戦争を社會的發展段階とともに、研究することによつて、解明することを得るであらう。一九三七・二・一七稿了

附記 私の本論文で論じたところは、一現代における戦争への條件、二現代戰術論の動向、三社會學と戦争間

題、社会ダウイン主義、四社会ダウイン主義の批判と生存闘争の形態、五戦争の本質(クラウゼヴィッツの所論)、六戦争起源論、七戦争起源論(續)、八戦争の起源に関するペリーの學說、九オッペンハイマアの所論である。戦争の本質及び起源の問題を客観的に取扱ひ、戦争社会学の出発点を構成するものである。私の戦争社会学は、この點から出發して。

(一) 戦争形態論——各時代の戦争の形態を論ずる。

(二) 戦争遂行論——戦争が一定の社会的段階において如何にして遂行せらるゝかの問題。

(三) 戦争對策論——戦争に對する種々の對策運動、例へば、軍備擴張、軍備縮小・戦争反對運動などに言及する考へであるが現代の戦争が、研究對象の主體であることは勿論である。しかしまだ體系的結論には到達してゐない。他日の研究を期する次第である。大方の教示を得たいと願つてゐる。

世帯構成に現はれた地域性

『三田』社会調査報告第三

奥井復太郎

序

『三田』社会調査の報告については既に、人口構成及び身分構成に関する報告を發表した。本號に於いては、其の世帯構成の状況を全地域及び各地区に就いて檢出して見る。恐らく第二次報告、即ち人口の身分別構成情況に關聯して説明し得らるゝ所が少くなく、又、世帯構成の情況それ自身が、各地区の地域的特色を示す指針となる所、多からうと思ふ。

(一) 世帯構成

本調査地域の人口には之れを世帯別に分類すると總世帯五二九四戸となる。六十三區に對しては一區當り平均八十四戸である。地區別に見れば世帯數の大小は、各地区總人口の場合と同様に頗る幅が廣い。最少は第十六區の三十二世帯で、最多は第十九區の百八十四世帯である。今之れを表にして示せば左の通りである。

世帯構成に現はれた地域性